

2025年度日本独文学会春季総会・研究発表会報告 (Y. Ishida) [J]

2025年度日本独文学会春季総会・研究発表会は、5月24日（土）および翌25日（日）の2日間に渡って開催された。会場の中央大学多摩キャンパスは都心から電車で1時間ほど要するが、280名もの参加者にご来場頂くことができた。懇親会も129名の方々に参加頂き、盛会のうちに終えることができた。

2023年度春季の開催校だった明治大の富重与志生氏のコラムには「できることなら〔春季の研究発表会は〕ぜひ台風シーズン前の5月開催であって欲しい」と記されているが、昨今6月は台風に加えて猛暑に襲われることもあるので、5月開催が望ましいと改めて思った。ちなみに、今年の研究発表会当日は5月でありながら平年より5度ほど高いという予報があったが、八王子では気温がそれほど上がりず、羽織るものがあってちょうどよい気温だった。

報告者が中央大学で日本独文学会春季総会・研究発表会を迎えるのは、1998年春と2012年秋に続き、今回が3回目となるが、2回目までは、すべての研究発表の要旨があらかじめ冊子として用意され、その校正は開催校が担当する等、今よりもやることがたくさんあった。しかし、それ以上にドイツ語教員の数は多く、その大半は独文学会に所属していたので、マンパワーは十二分だった。

それから13年、ドイツ語担当の専任教員が退職しても欠員補充は必ずしもなされず、大学全体でドイツ語担当者の数は減少の一途をたどった。加えて、哲学や歴史学等を専門とするドイツ語担当教員の割合が増えたため、日本独文学会所属の本学専任教員は半減し、2025年度の春季総会・研究発表会を引き受けることができるのか危ぶまれる状況だった。しかし、2024年3月に開催された「中大ドイツ学会」——本学のドイツ語担当専任教員の学部横断的な組織——の総会において研究発表会開催を引き受けることが決定された。これはひとえに、本学の独文学会会員の中で最も若手である商学部の高次裕氏が自ら代表者となることを引き受け、研究発表会を本学で開催すべく尽力してくれたおかげである。事前の準備だけでなく、開催当日の業務も大部分を高次氏がほぼ一人で担っていたように思われる。氏のそうした姿に他の人たちが共鳴して、皆が協力しようという雰囲気が醸成されたという面がとても大きかった。

なお、少ない人員で引き受ける以上、研究発表会のスリム化・効率化が不可欠なので、学会参加費の徴収に際して事前オンライン決済を利用する、他大学の先生方にも発表会場の司会者をお願いする、懇親会を省略する、といった具体策が挙げられたが、今回に限って言えば、参加費はすべて当日に現金で徴収し、司会もシンポジウムを除いてほぼ本学の教員で実施しており、懇親会も開催された。しかし、13年前と比べると、プログラムや研究発表会要旨集の作成や校正等の、以前は開催校に任せていた諸々の作業がなくなっており、そうしたことから、開催校の負担は大幅に軽減されており、既に十分にスリム化され

ている。昔の研究発表会を知る者は、少なくなった人員でかつてと同じことをこなさなければならないと思って、二の足を踏んでしまうかもしれない。しかし、今はスリム化・効率化がかなり進められており、今後さらに進められるだろうから、開催を打診された大学の方々には、昔の記憶に囚われることなく、近年の開催校に実情を確認した上で、実施可能か否かを判断して頂きたい。

そのほか 13 年前との違いとして、準備の打ち合わせ等の会議がオンラインで行えるようになったことが挙げられる。これにより、都心キャンパス勤務者も、授業日であっても準備の会議等に参加できるようになったが、具体的な準備作業は現場にいなければできず、多摩キャンパス勤務の人たちで分担して頂くこととなった(報告者は都心キャンパス勤務の 1 人であり、人手が少ない中、事前準備に関して何もお役に立てず、申し訳ない限りである)。

学生アルバイトの募集は、多摩キャンパス所在の学部のゼミ等で学生に声掛けをする形で、合計 38 名が募集に応じ、受付、誘導・案内、発表会場待機等を担当した。各日毎のアルバイト数は、開催前日(23 日)は 4 名、初日(24 日)は 24 名、2 日目(25 日)は 32 名だった。富重氏がコラムに記している 2023 年度春季の研究発表会での学生アルバイトの数(初日 17 名、2 日目 12 名)と比べると、かなり多いように思われるが、明治大では参加費の事前払い込みを行っていたことや、教員の学会会員の数の違いなどもあるので、本学においては適切な人数である。その他、時給(学部生 1,250 円、大学院生 1,350 円)は、昨今の学生アルバイトの時給水準を参考に決められた。

アルバイト募集に応じてくれた学生たちはどんな仕事でも手際良くこなし、研究発表会を実施する上で大きな助けとなってくれた。また、学生アルバイトとして研究発表会に参加することは、単に金銭的な収入を得るというだけではなく、「学会」というものに触れるよい機会でもあるということも感じた。文学部所属の教員から聞いたところによると、学生たち自身も「大きな学びになった」と喜んでいたという。「1 年生にとっては上級生との良い出会いの場になり、上級生にとっては、論文でしか名前を知らない研究者を直に見て、(会場担当の場合はそれに加えて)話を聞くことができるという貴重な機会であった」とのことである。

反省点としては、発表会場に卓上のマイクスタンドを用意できなかったことを挙げておきたい。発表者が担当した会場では、原稿を片手で持ち、もう一方の手でページをめくるので、マイクスタンドが必要だということをお伝え頂いた発表者がいたが、本学の教室は教員が授業を行うことを想定しているため、ハンドマイクはあっても、卓上のマイクスタンドは教室の備品には入っていなかった。この点は、研究発表会を次に行う担当校の方々への申し送り事項とさせて頂きたい。

今年の春季研究発表会は、日本独文学会が国内有数の会員数を誇っていた頃に比べると、

実にこぢんまりとしたものであったが、講演、研究発表、シンポジウム等、内容が充実しており、終了後、多方面より「とてもよい研究発表会だった」という好意的なお言葉を頂いている。ご協力頂いた方々には、この場を借りてお礼を申し上げたい。また、本学独文学会員の年長者の 1 人でありながら何の役にも立てなかつた報告者としては、高次氏を筆頭とする本学独文学会員の仲間たちには心より感謝申し上る。

石田 雄一（中央大学）

2025 年 8 月 30 日